

刑事としての経験を基に小説を出版

やましたのぶよし
山下信義さん

ブンヤ魂(出版/冬幻舎)

元マル暴刑事が描く、報道と捜査の最前線。本当の正義とは何か。情報と信念が交差する中で警察、記者、暴力団、それぞれのリアルがぶつかる人間ドラマ。

▼販売場所/布施書店(牧之原市)

静岡県警に勤めた36年間を暴力団犯罪捜査の最前線で過ごした山下信義さん(上岬区)。信義さんは、現場を自分の目で見た者しか知りえない、捜査機関と記者、暴力団の実情を描いた小説「ブンヤ魂」を出版した。

警察のリアルを暴く

信義さんが暴力団犯罪の取り

り締まりを担う「マル暴刑事」を志した原点は、警察官の友人が職務中に暴力団同士の抗争に巻き込まれ、負傷したことにある。警察官人生の中で、特殊詐欺の背景には反社会的勢力の存在が大きいと痛感。「暴力団や組織犯罪を取り締まりたい」という気持ちで、信義さんを動かし、約30年間マル暴刑事として捜査に専念した。

犯罪を減らすために、自分には何ができるのか。思いついたのが、警察での書類作成を通じて磨かれた文章力を活かした、小説の刊行であった。在職時から小説の構成を練ってきたという。

退職後、1年で原稿を書き上げ、出版社と妥協は許さず本の推敲を重ねた。執筆から

3年経った令和8年3月、ついに信義さん渾身の一冊「ブンヤ魂」が誕生した。

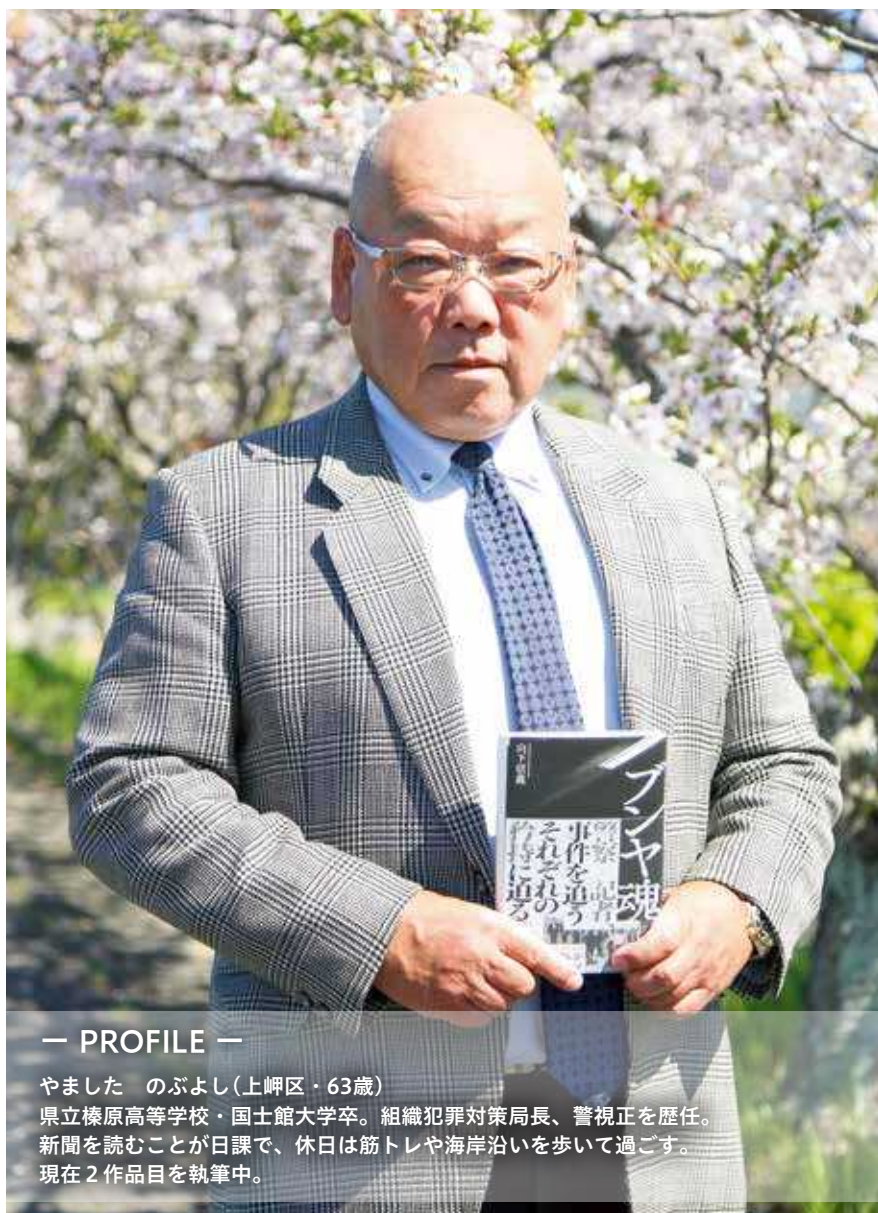
小説に込めた思い

小説の舞台は「御前市」。御前崎市をモデルに描き、鱈や信義さんが実際に通っていたスーツ仕立て屋などが登場する。市民にとって親しみやすい内容だ。

記者の視点から描かれる警察小説は多いが、警察官視点で構成される小説は稀である。小説を読んだ記者からは「初めての構成で、印象に残る作品だった」と評価された。

当時小説の執筆を誰にも告げていなかった信義さん。出版後、旧友などから多くのメッセージが届いた。自身の小説が多くの人に届いていることを実感したという。

信義さんは「自分の経験を書籍として世に出すことができてよかった。犯罪に関する知識が、読んだ人の記憶に残り、いざというときに自分や周囲の人を守る防波堤になっしてほしい」と真剣なまなざしで本を見つめる。小説に込められた信義さんの思いが、犯罪抑止の力になることを願う。



— PROFILE —

やましたのぶよし(上岬区・63歳)

県立榛原高等学校・国士館大学卒。組織犯罪対策局長、警視正を歴任。新聞を読むことが日課で、休日は筋トレや海岸沿いを歩いて過ごす。現在2作品目を執筆中。